

第4回目 打保・蟹寺発電所維持流量検討会 会議録

開催日 令和7年1月27日（月） 14:00～
会 場 飛騨市 宮川振興事務所 2階会議室
参加者 構成員 18名 清流みやがわをとりもどす会 5名、宮川下流漁協 3名、
高原川漁協 3名、富山漁協 2名、種蔵そばまつり実行委員会 1名、
（株）飛騨ゆい 1名、飛騨市 2名、有識者 1名、
オブザーバー他 13名 富山河川 3名（web）、古川土木 1名、
関西電力（株）6名、事務局（飛騨市） 3名
合計31名

1. 開会の言葉 飛騨市宮川振興事務所 清水次長
2. あいさつ 飛騨市基盤整備部 森部長
3. 維持流量の検討について 司会進行：座長 高橋先生

（1）刺し網期間中の河川環境調査結果 ■宮川下流漁協

打保ダムから河川維持流量の放流中である6月と維持流量抑制中の10月に河川環境調査を実施した。

■放流量調査

- ・ 維持流量抑制73日間（8/20～10/31）
打保ダム 蟹寺えん堤
- ・ 維持流量のみの日数 43日間 0日間
- ・ 日平均放流量 7.9m³/s 8.7m³/s

■水質調査

- ・ 実施日 6月5日、10月2日
- ・ 各調査地点における水質はおおむね環境省が示す生活環境の保全に関する環境基準のA類型および水産1級を満たす水質であった。
- ・ pHが高いが魚類に影響は無い。

■水面水深計測調査

- ・ 実施日 6月10日、10月2日
- ・ 動植物の生息又は生育地の状況へ与える影響

「正常流量検討の手引き」記載の「魚種別の必要水利条件の参考例」を参考。
今年の結果として、ほぼすべての調査地点における流速、水深の平均値は各魚種に必要とされる水利条件を満たしている。また、一部のヤマメおよびウグイの産卵に必要なとされる条件を満たさない調査地点についても、測定測線の13～40%の幅では条件を満たしている。

- ・ 景観・観光へ与える影響

評価基準である水量感（見かけ水面幅と見かけの河川幅の比）の0.2は満たしており、概ね満足であると考えられる。

■ 魚類調査

- ・ 実施日 6月10日 10月2日
- ・ すべての調査地点においてウグイを捕獲することができた。
- ・ 資源量の動向の評価については、今後5年間の調査の結果の比較をもって行う。

■ 漁獲量調査

- ・ アユ資源の動向の指標として、アユ漁獲量および漁業者の動向を用いる。
漁業従事者 308人、遊漁者数 6,921人
アユの漁獲量 18千匹
- ・ 資源量の動向の評価については、今後5年間の調査の結果の比較をもって行う。

(2) 宮川の鮎による地域コミュニティについて ■ 宮川振興事務所

- ・ 宮川村時代も杉原観光ヤナがありたくさんの方が訪れた。
- ・ 鮎の販路拡大には、刺し網漁による鮎の供給量が必要である。
- ・ 市場から鮎の出荷量を増やして欲しいとの要望がある。
- ・ アユの買取り、販売も年年増加している。
- ・ 宮川町の宿泊施設は、アユ釣り客に支えられている。
- ・ 漁協の協力のもと宮川町の児童に宮川の鮎や伝統漁を知ってもらうための体験行事を行っている。
- ・ 出荷の鮎の販売金額は把握していない。

(3) 今後の検討会について

意見の主な内容

- ・ この検討会は河川維持流量の抑制により河川環境への影響を検討することが直接的な検討会の課題や目的であるが、環境への悪影響、アユの漁獲量の調査のそれが地域振興にどのような影響を与えたのかという流れで検討する方が良い。
- ・ これまでの調査以前のデータがないので、今年度のデータのみ解釈は難しい。
- ・ 地域と密接につながった漁業というところで評価していく必要がある。
- ・ アンケート調査など毎年続けていけばどうか。
- ・ 河川によって環境状況が異なるため、一律的な規制ではないと思っている。
- ・ これからも川と関わりながら楽しく暮らしていきたい。
- ・ 維持流量の抑制に感謝している。
- ・ 地元の鮎資源をフル活用したいという思いを汲んでいただき、地元とコミュニケーションをとって良い方法を模索していく必要がある。
- ・ 5年間この調査を続けて欲しい。

飛騨市 国に対して判断していただくための材料、資料を作るために調査が必要である。

富山河川 川にはそれぞれ特性があるため、一つの考えとして維持流量調査の手引きを参考に検討会において判断の検討を進めていくことが必要。この手引きを満たさないからダメであるかということではない。

高橋先生 維持流量調査の手引きをもとに調査すると共に、地元の事情を尊重、考慮するということであると確認した。

今回の報告書では、結果をまとめることはできない。5年間調査を積み重ねていく必要がある。まとめる指針の検討が必要であり、次回会議までの議題とし、それぞれ考えていただきたい。

ま と め

- ・ 今年度行った調査項目を基準として調査を進めて行く。
- ・ 必要であると認められた調査項目があればその都度判断して行く。
- ・ 地域住民の意見も集約しながら次回検討会に繋げていく。
- ・ 5年間調査を行い、結果をまとめる。